

ジュニアオリンピック出場にあたり、

ご声援・ご支援ありがとうございました。

第39回ジュニアオリンピック(10/24~26 日産スタジアム)RESULTS

- A200m 久貝 瞳 26秒07(−0.8) <準決勝> 26秒18(0)
- ABC女子共通400mR 大阪選抜(第3走者に久貝) 48秒82
 - <準決勝> 48秒31 大阪中学新記録
 - <決勝> 48秒48 5位

- 大会前日。昼の12時過ぎに新幹線のぞみ号が新横浜駅に到着。昨年は不出場ただけに、この見慣れた風景を目の前にして、ジュニアオリンピックの大舞台に立てたことの感動と感謝の気持ちでいっぱいになりました。昨年のジュニアオリンピックの選考レースで2位に破れ、代表入りを逃した久貝も、感慨深げに新横浜の風景を見つめる。久貝は大阪選抜のリレーチームでもあるので、1時30分から日産スタジアムでリレーメンバーと調整練習をする。巨大なスタジアムには、全国各地から集まった中学生のトップアスリートが集結。それぞれが気合いの入った調整練習をしていた。

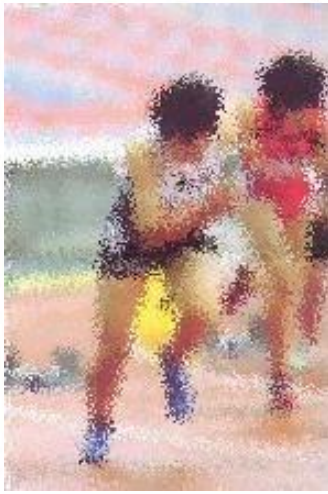


- 大会初日。朝から雨が降っている。思えば、夏の全国大会でも初日の200mに久貝が出場したときも土砂降りの雨だった。本人は「雨女」と呼ばれることを否定していたが、おかげさまで雨のコンディションには慣れている。雨天練習場でウォーミングアップを入念におこなうが、そこはいつもの如く、戦場のように殺気だっていた。



10時40分開始のAクラス女子200mの予選4組。一番外側の9レーンに久貝が登場。久貝が勢いよく、第2曲走路のコーナーを駆け抜ける。直線にはいり、8コーナーの選手に差をつけられるが、3着でフィニッシュ。無難に準決勝進出を決めた。

準決勝は13時30分開始。3組あり、その組の2着とプラス2名が決勝に進出



できる。3組の9レーンに久貝。2年前はCクラス100mで7位入賞しているだけに、中学校の競技生活最後の大舞台で何とかファイナリストにという強い思いがある。とにかく「(リキまずに)前半から行く」ことをアドバイスしていた。降りしきる雨の中、コーナーを出てからも高速の走りをみせたが、ホームストレート中央付近で体が揺れだした。26秒18。6着。久貝の準決勝敗退が決まった。久貝の自己記録が25秒69。結果論になるが、この記録を出していれば、決勝進出は可能であった。しかし、スポーツの世界で「たら、れば」は禁物である。この舞台で記録を出せなかったのも現時点での実力である。この事実を

認め、今度は高校の競技生活で、もう一度全国のファイナリストに挑めばよいのだ。2月に日本ジュニア室内陸上のレースを残しているものの、屋外の公認レースでは東雲のユニフォームを着て走る最後のレースとなった。(リレーでは大阪代表のユニフォームを着ることになるため。)久貝の勇姿をしっかりとこの目に焼きつけた。淋しい思いもあるが、今はその感傷にひたっている場合ではない。リレーにすぐに気持ちを切りかえなければならないことは、何よりも久貝自身が一番良く知っている。

- 大会2日目。練習会場になっているサブトラックに朝の7時に集合。大阪のリレーチームの練習が始まった。きびしい選考レースを勝ち抜いて大阪代表の座を勝ち取った4人。チームが結成された9月の頃は、よそよそしい雰囲気もあったが、ここに来てみるみるひとつのチームになってきたように感じる。引き締まった表情で練習に取り組む時間帯と、笑顔で冗談の言える場面を見事に使い分けている。2年前の久貝のときもそうだったが、1年生のS選手も3年生2人と、2年生一人の先輩選手ともうまくなじめるようになっていた。時おり見せるドリルの動きには目を見張るものがあり、この選手の豊かな将来性に感動した。この日、個人種目の出場のない彼女はいつも久貝と行動をともにしながら、大阪の選手の応援や記録の書きこみなどの裏方の仕事に徹していた。



- 大会3日目。朝の5時に起床。朝7時からサブトラックでアップ開始。各都道府県代表の男女それぞれ47チームが日本一を目指して気合の入った練習をする風

景はいつも圧巻である。ABC 共通女子4×100mR 予選は9時開始。大阪は予選4組8レーンに登場。久貝は第3走者。予定どおり？小雨が降り出した。

ピストルの閃光とともに第一走者のSが飛び出し、2走の今大会Aクラス100m8位のNにややつまりながらバトンパス。Nと3走の久貝もうまく息が合わず、最後は久貝が後ろを振り返りながら、バトンをもらう始末。4走のAも見切りが早く、最後はゾーン手前でAが減速しながら、これまた振り返ってバトンをもらう悪循環。結局、大阪はこの組3着でゴールする。「早く飛び出しすぎて、オーバーゾーンで失格にならないように。」という指示もあり、このあたりが選抜チームの難しさでもあるのだ。



しかし、そのあとの結果のアナウンスを聞いて驚いた。「3着は大阪。記録は48秒82」すばらしい記録である。バトンでこれだけ、ミスしながら、2年前に日本一になった時の予選のタイム49秒14を大きく上回っている。予選が終了して、例年になく全体的にレベルが高いことがわかったが、それでも大阪は5番目の記録で準決勝進出を決めた。

準決勝のスタートリストを見て頭を抱えた。1組9レーン。同じ組に予選を1位で通過している埼玉と奈良がいるのだ。準決勝は3組あり、各組2着とそれ以外のタイム上位2チームが決勝に進出することになるのだ。決勝でシードレーン（中央の4つのレーン。この競技場の場合は4、5、6、7レーンのこと）に入って、有利にレースをすすめたいという思いがあるだけに、この組み合わせは不利である。そのために「3着になっても大丈夫。4着でも充分（決勝進出の）可能性がある。」と、選手たちに言い聞かせている。「何としても、決勝に！」という強い思いがあるために、4人の選手たちの表情がさらにきびしいものになった。



12時45分。準決勝1組。このラウンドのきびしさはこれまでにいやというほど味わってきた。スタンドで見守っていても緊張感に包まれる。上が黄色、下が黒をベースにした（タイガースカラー!?)大阪チームのユニフォームを着た久貝が審判の指示で勢いよく飛び出して、マークをつけるために慎重に足長を測っている。やがて選手の名前がオーダ

ー順に紹介される。自分の名前を呼び上げられると久貝は右手をあげて一礼した。運命のピストルが鳴って、第1走者がきれいにスタートする。今度は大きなロスをすることなく、比較的スムーズにバトンが渡り、あっという間に久貝から、4走のAにバトンが渡る。このときは4番目くらいか。Aが決勝進出に向けて猛チャージ。

見事に三重をかわして、3着でゴール。

1着の埼玉がフィニッシュラインを駆け抜けると、速報タイマーは47秒4あたりの数字を示していた。やがて、アップテンボなBGMが流れて、正式発表。「1位 埼玉 47秒44 大会新記録 2位 奈良 47秒85」かなりレベルの高い記録である。「3位 大阪 48秒31 4位 三重 48秒52…」心の中でガッツポーズをした。この記録は2年前に日本一になった時の大阪中学記録48秒41を上回る、大阪中学新記録である。案の定、3組のレースが終わって、プラス2チームは1組の3着大阪と4着の三重であった。大阪は準決勝を終えて、3番目の記録で決勝進出を決めた。表彰台が狙える位置にいるのだ。



決勝進出が決まってから、プレッシャーと戦う重苦しい時間帯が流れる。最初は大阪の選手の応援をしたり、トレーナーのマッサージを受けたりしていたが、決勝のアップにいく1時間前くらいから見事に口数が少なくなっていく。シートの上でストレッチを繰り返していたが、やがてベンチコートにくるまって、瞑想するかのよう横たわる。このときの選手の気持ちはどんなだろう。まさしく、栄光の前には試練あり。声をかけてやることをためらいながら、プレッシャーと戦う4人の選手の健闘をひたすら祈ることしかできなかった。

16時40分。ABC女子共通4×100mR決勝。リレー以外のすべての競技が終わっているため、フィールド内はセーフティマットやテントやゲージもすべて撤収されている。照明にも灯りがともり、スポットライトのようにフィナーレを飾る8チームの選手たちを照らし出す。巨大な大型映像には、各チームの選手たちの動きや表情が鮮明に映し出される。大阪が3レーン、準決勝で大会新記録を出した埼玉が7レーン、47秒台を持っている奈良が5レーン、強豪兵庫が4レーン。大阪は強いチームを内側から追う展開になる。「位置について」のスターターの声で、競技場に静寂が訪れる。大阪の1走のSは大きく息を吐き、気持ちを静めてからゆっくりと腰を降ろし、スタプロに足をセットする。その落ち着きぶりはとても1年生とは思えなかった。日本一の夢に向かってピストルが鳴ると、8人の走者がきれいに飛び出す。S、Nとつないだバトンが第3コーナーへ。各走者の「は〜い！」という合図の声がこだまする。久貝は勢いよくとびだしたが、結果的に距離が合わず、ゾーンの手前でスピードを減速しながらバトンをもらう。大阪ベンチでは悲鳴にも似た声があがる。そこから久貝が猛スピードで前を追う。「ひさっがいー!!」大阪ベンチで何人もの先生が言葉にならない声援で久貝の背中を押す。バトンは4走のAへ。埼玉、奈良が抜けている。兵庫、愛知と続いて大阪。Aがどんどん差をつめていく。フィニッシュライン手前、表彰台の夢に向かって、Aは前方に自分の体を大

きく投げ出す捨て身のフィニッシュ。彼女はそのまま倒れて、体が1回転した。1着埼玉47秒57、2着奈良47秒94、3着兵庫48秒32、4着愛知48秒40、5着大阪48秒48。表彰台まで100分の16秒差。どのチームも表彰台を目指して、必死で勝負に出ている。僅差で惜しかったという見方もできるが、非情なまでにこれが結果のすべてである。

涙を流しながら、4人が帰ってきた。過去にも大阪選抜のリレーメンバーの経験がある3年生の2人、Nと久貝。このチームを引っ張ってきたNと久貝が表彰台を逃した責任をすべて背負い、大粒の涙を流す。「ベストを尽くしたのだから、胸をはれ！5位入賞。おめでとう。」涙が枯れたあとは、笑顔の4人になりました。



- それにしても、久貝は幸せ者だと思った。1年生で東雲のリレーチームのアンカーに抜擢され、きびしい戦いを制して大阪の頂点に。夏の全国大会も1年生アンカーとして、準決勝まですすむ。秋のジュニアオリンピックでは同じ東雲の3年生の北村とメンバーを組み、夢の日本一に。そして、中学校生活最後のリレーがジュニアオリンピックの決勝の舞台上、しかも5位入賞したのである。リレーが大好きで、リレーにこだわり、リレーの魅力、バトンの魔力を追求してきた彼女らしい見事な中学校の競技生活であった。もちろん、順風満帆ではなかった。敗北もあり、多くの挫折もあった。それでもくじけず、前を向き、自分の夢を輝かせるために努力を重ねてきた彼女のこれまでの道のり。身近に接していただけに、改めて振り返ってみると胸が熱くなる。はっきり言えることは、幸せな競技生活は久貝が自分自身の手でつかみとったということである。

多くの方々にたくさんのご支援、ご声援をいただきましたことに感謝しています。また、大会期間中はいろいろとご迷惑をかけました。これからも陸上競技を通して、選手たちと多くのことを学んでいきたいと思っています。今後とも、よろしくお願いいたします。

陸上競技部顧問一同